

清潔観にみる生活意識の変化

——近世以降のヨーロッパを例として——

末 広 菜穂子

はじめに

人間生活の歴史を対象とする生活史の研究は、生活諸環境の歴史的解明にとどまらず、その生活諸環境の中での生きた人間の軌跡、すなわち、生活という舞台の主役である人間自身の生き生きとした姿を映し出すことをめざしている。精神・肉体を兼ね備えた複合的存在である人間の行動を捉えるためには、単に人間の表面的行動を追うだけではすまされず、当然、その行動の背後にある意識のひだの中にもわけ入らねばならない。新しい歴史学を標榜するフランスを中心としたアナール学派の研究において、心性史が最も注目されているのもその重要性が強く認識されているためである。歴史をその深部から動かす心性の歴史の究明こそが、生活史のみならず、歴史研究のもっとも重要な側面の一つであると言えよう。

しかしこれは、必要とされながら、実は最も困難なことである。アナール学派においても、大衆の心性へのアプローチは、大衆信仰、道徳、性行動、性別役割についての伝統的意識、生や死への態度などに広く及んで、大きな成果をあげているが、さまざまな問題点も指摘されている。特に今日のわれわれのものとはまったくかけ離れた時代の生活文化の中で通用していた過去の価値観、信仰、生活意識などをどう位置づけるかが大きな問題である。今日の尺度では不合理で、無意味にしか見えないかつての生活慣行や信仰、呪術的行為を、単なる遅れた過去の社会の産物と軽視してしまうことは、われわれになにももたらさないだろう。われわれと異な

る世界では、個人の私的生活の中において、あるいは個人と社会との関わりの中において、それらは合理性（近代的・科学的合理性とは別の種類の）を有する機能を持っていたのではないか。さらに、ひとたびある時間・空間において獲得された合理性は、たとえその時間・空間にかかわる外的条件が変化し、本来の存在意義を失ってしまったとしても、伝統という社会的必要物となって、ある時には人間生活の摩擦を避ける働きをし、ある時には人々に圧迫感を与えながらも、存続し続ける場合がある。既成秩序の維持という理由がそうした伝統的慣行の保持に力を貸すこともあっただろう。はたまた、合理性などでは割り切れない人間自身の本性に根ざす何か、それらの存続や復活にかかわっているのか。過去の人間生活への問いかけは、現代生活における、ともすれば生活の便利さ・変化の早さの中で見失いがちな、多くの未解決の問題を解く手がかりをわれわれに与えてくれる。その意味では、研究者自身が、自らの陥っている価値観から脱し、恣意的な選択・評価をできうる限り避ける必要があるが、概して、われわれは今日の「常識」から逃れえず、狭い視野からの解説を述べるに留まりがちである。むしろ、歴史研究を通じて多くの異文化に触れることによってこそ、自らの無知・偏見から研究者自身が脱することができると言えるのかもしれない。

本稿においてとり上げる、清潔さをめぐっての生活慣習・態度・意識も、歴史の中で大きな変化を見せた心性の一つである。それは長い歴史の中ではごく最近になってからの変化であるが、劇的变化であったために、それ以前の状態は、われわれにはきわめて異質に感じられる。しかしわれわれの目にはやや異様に見える過去の日常生活をここで顧みることは、今日の生活の優位を確認するためではない。清潔観という問題には、人間と肉体との関わりが赤裸々に示される。人間が生物的存在である以上、生存のための排泄からは逃れられない。すべての生の営みは必然的に、汚れをもたらす。飲食、労働という生存維持の活動はなにかんづくそうである。したがって、人々がその汚れにどう対処してきたかを見ることは、人間の最も深

い部分に触れることになる。汚れに対する忌避、受け入れ、共存、無関心、嫌悪、恐怖といった異なる態度はなにを物語るのか。汚れの除去、隠蔽、偽装に傾けた人々の努力はどのようなものだったか。これらを吟味することにより、清潔さに関わる過去の慣行が明らかに、あるいは暗に表わしている当時の社会の現実の諸側面とそこで生きる人間の生々しい姿を知ることができるだろう。また、生活意識そのものがどのような要因が働くことによって変化していくのかについても窺い知ることができるのではないだろうか。本稿では、興味深い態度の変化がみられる近世以降のヨーロッパを例として、以上の点を考察していきたい。

1. 水と肉体（伝統的・長期的態度）

清潔さを保つための水を用いた洗浄行為は、今日のわれわれにはあたりまえの習慣となっているが、過去においては必ずしもそうではない。F. Loux の研究にみられる伝統社会の態度は今日とはまったく逆であり、洗浄はむしろできる限りせず済ます行為、非日常に属する行為であった。きわめて脆いものであると見なされていた人間の肉体に無用に触れることは避けるべきことであった。とりわけ危ないと考えられたのは乳児の体で、これを包み、かんじがらめに巻きつけた当時の窮屈な産着も同じ考えの結果であった。そして、汚れ自身も一種の衣服のように体を覆い、これを保護すると考えられていたのである⁽¹⁾。肉体を動かした結果生じる汗や垢などの汚れは、当然そこに存在する肉体の一部、外皮であった⁽²⁾。したがってこれを洗い流すことは、特別の儀式的・祝祭的行為ですらあった。入浴や洗濯の日を限定するなどの洗浄にまつわるさまざまな禁忌がそれを示してい

(1) フランソワーズ・ルークス著、蔵持不三也・信部保隆訳「肉体—伝統社会における慣習と知恵」マルジュ社 1983年、106-112ページ。

(2) 体を洗う道具はと尋ねられて汗で洗い流すと答えたブルゴーニュの老人の話のように、汗そのものが汚れと見なされていたかどうか疑問である。イヴォンヌ・ヴェルディエ著、大野朗子訳「女のフィジオロジー」新評論 1985年、119ページ。

⁽³⁾ 洗浄は、日常的なじみ深い状態から非日常のハレに移行するための儀式的意味を帯びていたのである。長い間人々にとって、汚れは忌避するものと言うより、親しい存在であったと言える。

また、洗浄に用いる水の肉体への影響力についても長く守られた考え方が基礎にある。水は、大気、土地などとならんで人の体に影響を与えると、いうヒポクラテスによる考えや、温、冷、湿、乾の原質を持った火、水、空気、土が万物のもとであるというガレノスの考えが古代以来、伝統的に引き継がれていた。中世医学における肉体観について研究した M.-Ch. Pouchelle によれば、当時、肉体にとって水分の過剰は常に注意されなければならなかった。これはすなわち体液の過剰を意味し、傷の化膿、体重過多、寄生虫発生の原因ともなる⁽⁴⁾。また、洗浄による水との接触も人間の弱い肌をあらゆる危険に晒すことと見なされた。皮膚には無数の毛穴があり、特に熱い湯によって暖められた皮膚は弛緩して、穴を開き、水中や外気に含まれた毒素をやすやすとそこから体内に取り込む⁽⁵⁾。さらに、熱い湯につかる入浴行為そのものが体力を消耗させ抵抗力を失わせるとされたため、いっそう肉体は脆く侵されやすい状態となる。当時人々に最も恐れられたのは、疫病、とりわけペストの流行であったが、伝染病である以外は定かなことが判らないこの疫病を避けるには、病源からはなれるしか他に有効な手段がなかった。人々は他人や外部との接触を絶つことに躍起となり、特に有毒な瘴気に体が触れることを避けた。アンブロワーズ・パレは

(3) 19世紀のフランス農村部に伝わる諺は、金曜日の洗濯や身体の手入れを戒めている。入浴は土曜日に限られていた。F. ルークス著、前掲書、108ページ。また、同じ頃のニヴェルネ地方では、2月2日、9月8日、12月8日の聖母マリアの祝日、聖週間の終わり、クリスマス及び5月は洗濯が禁じられていた。Tuillier, G., "Pour une histoire de la lessive en Nivernais au XIX^e siècle", *Annales (E. S. C.)*, 1969 No. 2, pp. 381, 382.

(4) Pouchelle, M. -Ch., *Corps et chirurgie à l'apogée du moyen-âge*, Paris 1983, pp. 271-277.

(5) Vigarello, G., *Le propre et le sale, L'hygiène du corps depuis le moyen âge*, Paris 1985, pp. 15-18.

「蒸気風呂や風呂屋は禁じられるべきである。なぜなら入浴は肉体及び体質が軟化して皮膚の穴が開くため、悪疫の蒸気が急速に体内に入り込み、突然に死をもたらしていることはしばしば観察されているからである」と述べた⁽⁶⁾。人々は、疫病の伝染を助長させるもととなるとして、水を恐れ、危険視した。そのメカニズムが正確に解明されていなかっただけに、恐怖はよけいに高まったのであった。ペスト流行時の公共浴場の閉鎖は、隔離措置と同じく、病気の伝染を避けるための方策として15、16世紀頃から、ヨーロッパの各都市において徹底的に施行された⁽⁷⁾。さらに16世紀に入ってから梅毒の猛威がこれに拍車をかけた⁽⁸⁾。入浴慣習は（もちろん、当時は富裕な人々に限られ、さほど一般的な慣習であったとは言えないが）すたれ、日常生活における水の使用は稀になった。その結果ヨーロッパ近世に水を使わない洗浄法が現われることになる。水と人間は、伝統的な肉体観の優越のため、疎遠な間柄であり続ける。水への恐怖は後のコレラ流行時にも再び意識されるのだが、この時はペストと同じ結果を招かなかった。以前のような漠然とした水への恐怖が、汚れて悪臭を放つ特定化された水への恐怖に置き代わっていたためである⁽⁹⁾。

もっとも、水がいつも忌避されていたわけではなく、そのプラスの影響力も知られていた。水治療法、温泉での湯治は古くからある。その場合、

(6) *Ibid.*, p. 17.

(7) ペスト流行時におけるヨーロッパ各都市の衛生措置については、拙稿、『近世ヨーロッパのペスト流行期における衛生行政の成立』『六甲台論集』第28巻第4号、1982年1月。

(8) ハインリヒ・シッパーゲス著、大橋博司他訳「中世の医学、治療と養生の文化史」人文書院 1988年、256ページ。当時混浴も珍しくなく、しばしば売春と同一視された公共入浴場は、梅毒の巣窟とみなされた。

(9) 空気であれ、水であれ、淀んで悪臭を発するものは病気の源として危険視されたが、それを解決するための水の役割はむしろ高まった。街路に水を流して清掃したり、淀みをなくすのに上下水道を整備し、水の流れを良くするなどの努力がなされ、水の浄化機能が利用された。Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 191-194. アラン・コルバン著、山田登世子・鹿島茂訳「においの歴史、嗅覚と社会的想像力」新評論 1988年。

水は病気と戦う手段となり、肉体内部に好ましい影響をもたらす。冷たい水は体を引き締め、暖かい水は体液の循環を促す。ローマの伝統を継ぐ発汗風呂や蒸気風呂は中世のヨーロッパでは到る処にみられたのである。しかし、長すぎる入浴は戒められており、水が基本的に危険な存在であることに変わりなかった。また、そこでは、肉体表面の汚れには関心は払われなかった。「ある人たちは娯楽のために沐浴し、女たちは子供を産めるようになるために、ある者は自分の病気を癒すために沐浴する」と16世紀の書物にはあり⁽¹⁰⁾、求められていたのは、清潔さのための清めではない。入浴は、清潔さとは別個のものだったのである。

ペスト流行を契機として、16～17世紀における公共浴場の閉鎖と、上層身分に見られていた私室での入浴慣行の消滅により、ヨーロッパにおいては、人々と水の交わりはほとんど絶たれ、以後18世紀半ばごろまでこの状態は続く。18世紀に入って再び芽生えた入浴への関心は、当時の人々の健康への関心と結びついたものであったが、そこに見られるのは水に対するまさしく伝統的な考え方である。ここでは、古くから認められていた水の効能が再評価されて、特に推賞されたのは冷水浴であった。暖かさによって、体を和らげ、くつろがせる温水浴に対し、冷水浴は、冷たさによって体を引き締め、眠っていた組織を目覚めさせ、活性化し、鍛えたとされた⁽¹¹⁾。冷水浴を励行した医者や衛生学者、道徳家の主張の中に、肉体と水に対するイメージについて、従来通りの伝統と並んで若干の変化が見てとれる⁽¹²⁾。熱い湯への入浴は、やはり歓迎されていない。しかし、かつては外部

(10) H. シッパーゲス著、前掲書、256ページ。

(11) Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 125-143.

(12) 1724年のイギリス人の医者の勧めは次のようなものである。「水の中でたびたび体を洗えば、汗腺の出口からたえず堆積する粘着性のある汚れや、またそれが濃縮された露状の気体を除去してくれるのだ。…それゆえ私は、その余裕を持つあらゆる人々に自宅に冷水風呂をつくり、たらいで手を洗うのと同じように規則的に入浴されるよう助言したい。」ローレンス・ライト著、高島平吾訳「風呂トイレ賛歌」晶文社 1989年、129ページ。18世紀の間に、冷水浴の効果は確信されることとなったが、それは科学的に証明されたというよりも直観的に認められたものであった。冷たい水のもつ硬質な強さのイメージが強調された。自然に帰れと唱えたルソーも「エミール」の中で、子どもの冷水浴をこの点で評価している。Vigarello, G., *op. cit.*, p. 131.

からの影響にもろい弱々しいだけだった肉体は、潜在的力、外部への抵抗力を備えた強靱さを持ち合わせた肉体にとって代わった。冷たい水の刺激は、肉体をもはや弱めることなく、内部の力を喚起するものとなり、その肉体への影響力は以前にもまして強調されることとなったのである。

したがって、18世紀半ばに再登場した頃の入浴は、16世紀以前のそれと同じく清潔さを意識したものでは依然としてなかったのである。人間の肉体にとって、汚れが親しい存在であったのに対し、水は常に異質の存在、不可思議な作用をもたらすものであった。肉体とそれに力を及ぼす水との関係は、新たな局面を迎えながらも古くからのつながりを保ち続けた。

2. 外見と清潔（変化以前）

入浴慣行が廃れ、水に触れることを極力避けようとした近世のヨーロッパにおいて、清潔への人々の関心はどのようなものであったのだろうか。これについては、G. Vigarello の研究が唯一のものであろう。

16～17世紀には手と顔の洗浄について触れた作法書があるが、17世紀を過ぎると、水を使つての洗浄はもはや推奨されなくなり、逆に、それが歯痛やカタルの原因になると戒められるようにさえた。朝の洗顔は顔の色つやを悪くするとされ、せいぜい手と口を水やワイン、酢ですすぐだけで、顔は布で拭くにとどめた。18世紀においてさえも依然として同様の考え方がみられ、水で洗うことより、むしろ清拭の方が勧められている⁽¹³⁾。この水を使わない洗浄法 (*toilette séché; dry wash*) は、洗浄といえば水によるもの、と思ひ込むわれわれにとっては、中世と比べてさえ清潔度の後退に感じられる。しかし、少なくとも上流階層の人々にとっては、これは無知によるものというより、前に述べたように、肉体に害をもたらしうる媒介者である水を意識的に遠ざけようとする自己防衛であったのである。むしろ、身体の手入れそのものについてはきわめて関心が高く、1736年の Jean-Baptiste de La Salle のテキストでは、水こそ使用しないが、髪のと

(13) *Ibid.*, pp. 25-29.

かし方、切り揃え方、髪粉やふすまによる脂肪分の落とし方、爪の手入れ等々について事細かな記述がある。しかし、彼は同じテキストで、「毎朝顔を清めるのに白い布できれいにすることはきちんとした礼儀 (la propreté) である。水で洗うのはより不適当である、冬の寒さと夏の太陽に顔面が冒されやすくなるためだ」と記している¹⁴⁾。このように、水を使わない一方で、身じまいの手続きは精緻化した。

こうした身だしなみの作法は、中世以来、宮廷社会においては社交上の礼儀であり、清潔さではなく道徳の範疇にはいることであった。しかも問題とされるのは衣服の外に出て人目にさらされる部分であり、衣服に覆われた身体の大部分はなおざりにされていた。幅の広いたっぷりとした長い衣服で体を覆ってしまえば、その内部については特に注意されなかった。16世紀頃認められる一つの傾向は、この外衣の下に隠された部分への関心の現れである。毎日のこととは言えないまでもかなり頻繁にシャツを取り替えるという配慮が一部に現れてきた。この頃短い衣服が好まれ始めたせいもあってか、今まで外衣に覆われていたシャツの襟やカフスが外に現われることとなったが、そのシャツの白さが求められ始めたのである。1525年に描かれた絵では、フランソワ1世は、上着にスリットを入れて、シャツの白さをさらに強調した装いをしている。国王や貴族の中には、毎日、あるいは一つの活動ごとにシャツの着替えをする者もいた。17世紀頃の財産目録からは、貴族やブルジョワジーがおよそ30枚ほどのシャツを所持していたことがわかる¹⁶⁾。シャツを着替えないまでも替襟・替カフスという便利なものも用いられた。修道院でも、リネン類の管理が行われているが、17世紀には着替えの頻度も増し、トロワイエのオラトリオ会の規則では日曜と木曜の週2回と定めている¹⁷⁾。シャツの白さを保つには労力と経済力を要するため、これは清潔さにまして贅沢さを意味するものであったと言える。

¹⁴⁾ *Ibid.*, p. 28.

¹⁵⁾ *Ibid.*, p. 27.

¹⁶⁾ *Ibid.*, p. 77.

¹⁷⁾ *Ibid.*, pp. 87, 88.

衣服の社会的意義が大きかったこの時代においては、シャツの白さは着る人の地位・身分を表章したのである。

一方で、衣服の歴史におけるこのシャツの重要性の高まりは、人々のまなざしの深化を示すものでもある。外に現われる部分の重視は変わらなかったが、それまで衣服が覆い隠していたものが、シャツを通してほのかではあるがあらわにされることとなる。人々は真っ白なシャツの襟やカフスを見て、それらと触れ合っている見えない肉体を意識したのである。たとえ外衣は贅沢なものでもなくとも白いシャツを身につけることが礼儀となり、着る人の経済状態と同時に、清潔さへの配慮がシャツを通して語られることとなる。もちろんそれは肉体そのものの清潔さではなく、なによりも衣服の清潔さであり、間接的なものではあった。時代の経過と共に、富裕な人々の襟や袖口はひだや繊細なレースなどで装飾されてますます豪華になり、もはや単に白いだけでは十分ではなくなって、より差別化が図られる。一方でごく普通の市民はごく僅かの数しかシャツを持っていないので、一枚きりをぼろぼろになるまで着て夜寝る間に洗濯したり、襟に粉をかけて汚れをごまかしたりして苦心しながらも、やはりシャツの白さに関しては程度の差はありながらもこだわりを持っていた。⁽¹⁸⁾

シャツの白さが視覚に訴えるものであるとすれば、嗅覚もこの時代には大きな力を持っていた。中世にも香水の使用はあったが限られたものであった。疫病を避ける手段として用いられたせいもあるが、リネンの普及とともに香水の使用は社会の各層に広まった。口臭もシナモン水を口に含んでまぎらわそうとした。髪粉も主としてその香りに目的があった。安息香、ミルラ、ラベンダー、麝香、紫檀等の様々な強く甘い香りによって汚れを隠すだけでなく、⁽¹⁹⁾ 圧倒しようとする人々は考えていたのである。

このように、入浴慣行が絶えたヨーロッパ社会においては、それに代わ

(18) ルイ - セバスチャン・メルシエ著、原宏編訳「十八世紀パリ生活誌、タブロー・ド・パリ (上)」岩波書店 1989年、161-164ページ。

(19) Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 97-102.

るものとして様々な身だしなみの方法が存在し、工夫が凝らされてもいた。とりわけ、社会上層に位置する貴族たちにとっては社交生活上、なんらかの従うべき規範が必要であり、されにそれを絶えず細密化・洗練化していくことが要求された⁽²⁰⁾。しかしながら、貴族社会において尊重されたのは、あくまで目に見える部分でしかなかった。17世紀における‘propre’という語の用法にそれは表されており、今日では清潔を意味するこの言葉は、当時、予想を上回ような際だった上品さや、優雅さ、すぐれて美しい衣装、邸宅を形容する場合に用いられている⁽²¹⁾。人であれ物であれ外面に加えられた優れた手並の人工的装飾が‘propre’と呼ぶに値したのである。したがって厳しい服装規定により身分関係を可視的なものとして認識させた当時においては、社会下層の人々にこの規範が模倣さるべくもなく、‘propre’であることは、しばらくの間限られた人々の独占物であり続けたのである。

3. 社会関係と清潔さ (変化を起こすもの：1)

肉体の外面的な清潔さだけでなく、人格、生活スタイルすべてにわたって清潔さが好ましいものとして大きな価値を持ち、特に社会生活において良好な対人関係を維持するために強く求められ、時には強迫観念にさえなりうる今日の状況を見ると、清潔観の変化に対し、社会的要素の及ぼした影響は無視しえないだろう。この項では、18世紀後半から19世紀にかけての時期の社会的価値観の変化と清潔観の台頭の関わりを考えていく。

この時代に徐々に地歩を固めて、実力を得たブルジョワジーが、新しい生活スタイル、生活意識を導く旗手となった。清潔さについても、これを初めて今日に近いかたちで意識し、新たな価値観を形成して広めようとすることで、彼らは自らのアイデンティティーを確立しようとしたのである。その場合、彼らは中間階層として、上層と下層の両方の文化に対峙するこ

(20) ノルベルト・エリアス著、波田節夫他訳「文明化の過程 (下)」法政大学出版局 1978年、437, 438ページ。

(21) Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 90-97.

ととなった。前者は奢侈をめざす伝統的な貴族文化、後者はより古くから変わらずに存在しつつける貧しい一般庶民の生活のあり方である。ブルジョワジーによる、この容易に変わることのなかった両文化についての見直しあるいは否定から新しい価値観は生まれたように思われる。

伝統的貴族社会の持つ見かけの華やかさを追う安逸な生活意識に嫌悪を示し、ブルジョワジー達は自らにとって心地よい社会環境の確立をめざした。彼らの尊ぶ勤勉で、質素な実質主義的生活にとって、清潔さは恰好のものであった。貴族社会が豪華さを誇り、外見の華やかさを競ったのに対し、彼らはそれと対立する簡素さをやはり他に示す必要があったのである。ブルジョワジーにとってきちんとしている (*propre*) ことは、17世紀の貴族たちにとってのそれと正反対となったのである。1765年の *Encyclopédie* の *prepreté* の項には、「清潔さは贅沢さの追求、衣服の見せかけ、香料、香水と混同すべきではない」と記されている。⁽²²⁾ 清潔は何より節約と結びついた。身の回りの生活の浪費を防ぎ、無駄がないか気を配る精神が、身仕舞をきちんとし、清潔を尊ぶ心をも育て上げたのである。⁽²³⁾ 人工的装飾への嫌悪、活動性の志向、科学的合理性の尊重が、自然の与えたものをそのまま維持する方向へと彼らを向かわせた。「健康の基礎は、発汗の規則正しさにあり、これを達成するには皮膚を鍛えることが必要である」⁽²⁴⁾。前述の肉体内部の力への信頼はここから生まれた。かつての貴族の好んだ温水浴ではなく、心と体を鍛える冷水浴を推賞したのも彼らであった。怠惰を象徴する温水浴とは違い、冷水浴には禁欲的でしかもエネルギーな彼らの求める理想のイメージがあった。

さらに、18世紀終わり頃からの都市過密による社会問題は、ブルジョワジーが社会下層部に対してどのような態度をとるか決定づけた。特に、19世紀の訪れと共に到来したコレラは、かつてのペストのようにヨーロッパ

(22) *Ibid.*, p. 149.

(23) A. コルパン著、前掲書、236、237ページ。

(24) Vigarello, G., *op. cit.*, p. 154.

を繰り返す襲い、人々を恐怖に陥れ、その病源を絶つ道が必死で模索された。⁽²⁵⁾ 悪臭を放つ墓地、街路、病院、屠殺場、刑務所、人の密集地が攻撃的となり、ここに発生する腐敗した発散物が人々の健康を損なうものとされた。⁽²⁶⁾ 都市の、特に貧民生活区の不衛生な状態が明らかにされるにつれ、ブルジョワジーは恐怖、嫌悪、驚き、憤りなどのさまざまな念に駆られたに相違ない。彼らが行動を起こすのに時間はかからなかった。1802年にはセーヌ衛生委員会 (*conseil du salubrité de la Seine*) が設置され、パリ大学医学部にも衛生学の講座が設立された。⁽²⁷⁾ かくして、18世紀にはなじみの薄かった「衛生 (*hygiène*)」という語が、医学、自然科学、政治、宗教を結びつけた新しい概念として登場するのである。脅威に対する戦いの手段を手に入れたブルジョワジーの槍玉に上がったのは不衛生な環境のみならず、そこに住まう貧しい人々であった。貧民達の不潔さ、汚さはその不道徳性、だらしなさ、無秩序と同一視され、衛生政策の強化は、危険にさらされた秩序を回復する手段でもあった。⁽²⁸⁾ かつて理想とされた農村における牧歌的な生活への憧れも消え、現実の耐え難い状態——悪臭を放ち、汗と垢に

(25) ヨーロッパにおけるコレラの流行を社会史的に取り扱ったものに、見市雅俊・高木勇夫他著、「青い恐怖 白い町—コレラ流行と近代ヨーロッパ」平凡社1990年、がある。ここでは、コレラ流行は旧秩序（放縦な領主階級と怠惰な民衆から成る構造）を一掃し、新たな秩序を確立する好機であると、人々が意識していたことが示されている。同上書、156—159ページ。

(26) 1774年6月には、ブルゴーニュにある Saulieu の教会において、教会床下の墓から立ち昇った腐敗した瘴気によって、聖体拝領のために集まっていた40人の子供と200人の教区民、教区司祭が死亡するという事件が起こった。Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 155-164. この腐敗した瘴気はあらゆる病気の源として危険視されることとなった。A. コルバン著、前掲書、11—74ページ。

(27) 革命政府はこれにより、衛生問題を扱う永続的行政機関を得た。同上書、171ページ。および、Vigarello, G., *op. cit.*, p. 183.

(28) 貧しさ、汚さ、不道徳さを結びつけた言葉は、枚挙に暇がない。「不潔さは悪徳の制服である」、「清潔さは清潔さと呼ぶ。清潔な家は清潔な衣服を、清潔な体を、そして清潔な道徳を求める」、「もし人がぼろ服に慣れるようになったら、それは尊敬の心を失うことであり、そして尊敬を失えば、あらゆる悪徳への扉が開かれるのだ」。Ibid., pp. 207-209.

まみれた肉体労働の世界——が強調され、厳しく批判されることとなった。

このように、清潔観に現れた19世紀前後における変化は、旧き支配文化の担い手であった貴族と、何世紀も前と同じレベルの生活から逃れられない底辺の民衆という旧社会の二つの伝統にはさまれて、そこから台頭してきたブルジョワジーの新しいエネルギーの噴出の表れであり、きわめて社会的な背景の中で生まれたものと考えられる。したがって、ブルジョワジー主導の清潔観の社会各層への広がりや、社会関係の中で彼らの勝利を示すことになるのだが、経済力、政治的権力、知識を味方としながらも、現実には社会にあまねく普及するには多くの時間を要し、困難な経過をたどるのである。

4. 権威ある知識（変化を起こすもの：2）

人の体の汚れの正体が何であるのか、そもそもそれが汚れと呼ばれるべきものなのかについて、われわれは直ちに回答できるだろうか。われわれが体や手や髪を洗うのは、それが日常習慣として定着しているからで、いつも汚れの種類や量によって判断しているわけではない。一日の始まりに身繕いをし、仕事や外出の後、あるいは食事の前に身を清めるのは、なかば無意識に行っていることである。今日のわれわれは、その行為の妥当性を自明のこととして、詳細は専門家に一任してしまっさえている。しかし、そうした行為がまだ目新しいときには、その妥当性が論議され、新しい説明が（強制はあったとしても）納得されて広まっていったはずである。人々に新しい行為を受け入れさせるためには、なんらかの強固な理由づけが必要である。大ざっぱにいってしまえば、かつての時代においてはそれが宗教でありえ、今日においては、それは科学知識であることが多い。今日のわれわれには科学知識は万能であるかにみえるが、宗教の支配する社会においてはそうでないことは他の例からも明らかである。宗教上の教えが他の何よりも力を持ち、人々を動かす社会において、もし、その宗教が潔癖さを尊ぶならば、たとえ科学的知識に欠けていても、人々は熱心に

体を洗い清めるに違いない。道元は正法眼藏の中で身心を洗い清めて香油を塗り、塵や汚れを除去するのは仏法の根本であると述べ、細かく洗面、洗淨の作法を定めている。⁽²⁹⁾多くの宗教は清淨を重視し、そのための手段も多用であり、火、水、煙、音、油、土、血などが浄化作用を持つものとして挙げられる。ヨーロッパにおいて、人々が、体を洗うという習慣を獲得していく過程で、それを促したと思われる権威づけられた知識についてここでは吟味していく。伝統的社会において、とりわけ民衆間では汚れは人に害を及ぼす存在ではなく、むしろ人を保護するものであると信じられていたことは先に述べたが、これに対する否定的見解は存在したのか。そして、それはどの方面から発せられたものだったか。

まず伝統的社会において大きな影響力を持った宗教はヨーロッパの場合どうであろうか。キリスト教は洗淨を主として治癒効果から意義づけている。水は万物に生命を与えるものであるから、そこに靈的な力を見たのはキリスト教も他の宗教と変わりはない。清められた聖水に触れることにより、病は癒される。しかしそれは実質的な洗淨ではなくて、象徴的なものにとどまっている。先の項で述べたとおり、水の影響力が信じられていたとすれば、むしろそれに過度に触れることは危険であった。宗教思想の中で、清淨と不淨はきわめてその境界が曖昧なものである。清淨なものは、清淨ゆえに侵すべからざるものであり、不淨なものは不淨であるがゆえにまた触れてはならないものである。さらに複雑なのは、肉体の内と外の両面の清淨について異なる解釈がありえたことである。肉体の内側に隠された精神の清淨が宗教の究極の目的であるが、その際、肉体の外側がそれを反映するものとして重んじられる場合もあり、あるいは内側のみが問題であるとする場合もある。外側の清潔をこころがけることが、宗教的修業として積極的に肯定されるか、現世や物質への執着として逆に否定されるか。実際、内側と外側の清淨が両立すると考えるか、矛盾すると考えるかほんの微妙な差であるように思われるが、そこから生ずる実際の態度は全く正

(29) 道元著、中村宗一全訳「正法眼藏」誠信書房 1972年。

反対のものとなる。キリスト教に関しても、初期キリスト教時代においては「身体と衣服の清潔さは、その魂の不純さを示す」とされ、聖ベネディクトゥスも健康な若者の入浴を戒めたとされているのに対し、初代ローマ教皇の聖グレゴリウスは適度の入浴を奨励した。⁽³⁰⁾ 中世では聖フランチェスコが汚れを信仰の深さの証としている。外面の汚れは逆に内面の清浄を物語りうるのである。垢だらけのみすぼらしい乞食が聖なる存在とされたのも同じ考えからである。全体として、プロテスタントが「清潔は敬神に次ぐ美德」と唱えるまでは、キリスト教が積極的に身体の清潔に関心を持って取り組む事はほとんど見られないことであったようである。⁽³¹⁾ むしろ、性に関して厳格で抑圧的であったため、風紀の悪さを生み出す公共浴場には否定的であった。

医学の側はどうであったのか。イヴァン・イリッチはここ1世紀間の人々の健康状態の改善に医療はほとんど貢献をなさなかったと述べた。清潔の歴史に関してこの言葉は正しいように思われる。中世において最も広く普及したとされる『サレルノ健康規則』には、「入浴、葡萄酒、性愛はわれわれの身体をほろぼす。しかれども生命をつくるのは入浴、葡萄酒、性愛なり」と詠って、入浴の効用と害悪の両面性を示唆している。⁽³²⁾ 水治療法の効能を医学書は熱心に説きながらも、さきに述べたように、肉体に与える水の影響の大きさを常に前提として、過剰さを戒め、医師の適切な指導を要するとしている。⁽³³⁾ この点では、中世も19世紀も変わりがな

(30) ローレンス・ライト著、前掲書、48, 49ページ。

(31) アレクサンダー・キラ著、紀谷文樹訳『THE BATHROOM バス・トイレ空間の人間科学』TOTO出版 1989年、27ページ。プロテスタントの禁欲的生活の教えの最たるものとして、マックス・ウェーバーは労働と並んで摂食、菜食、冷水浴を挙げている。マックス・ウェーバー著、梶山力・大塚久雄訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神（下巻）」岩波書店 1962年、178ページ。

(32) H. シッパーゲス著、前掲書、264ページ。

(33) 鉱物成分の持つ自然治癒力に注目したパラケルススの流れをくむ医者たちの影響で、治療を目的とした温泉地への湯治は、16世紀末頃から活発になってきた。Brockliss, L. W. B., "The Development of the Spa in Seventeenth-Century France", *The Medical History of Water and Spas (Medical History, Supplement 1990 No. 10)*, edited by Porter, R., London 1990, pp. 23-47.

⁽³⁴⁾ い。治療のための入浴であったことが、入浴習慣を広めていく上でかえって大きな障害になったと思われる。人々にとって、入浴は医者の方から従ってこわごわ行なう行為であり続けた。⁽³⁵⁾

医者たちが入浴に認める効用も、科学的に立証されたというよりも、長い間、直観的なものだった。清潔の意義の確認は専門家にとってもきわめて新しいことである。皮膚呼吸の実験を経て、皮膚の穴を塞ぐと、体内で燃焼して発生した二酸化炭素の排出を妨げることが承認され始めたのは、19世紀後半よりもあとであり、パストゥール、コッホらにより創始された細菌学の成果が身体衛生に適用されるのは19世紀末になってのことである。⁽³⁶⁾ 病原菌の侵入そのものが病気を引き起こすのではないことは、免疫の研究ですでに確認されていたが、人の目には見えない菌があらゆる所に存在し、体内に入り込む可能性があるという事実は、人々の恐怖を高めるのに十分であったろう。一見きれいに見える皮膚にも数えきれない菌がくっついているのである。かくして、入浴において、洗浄の意義が初めて強調されることとなった。「頻繁な入浴と、その結果生じる洗浄は最も優れた殺菌法の一つである」⁽³⁷⁾。誰が触れたか判らないような紙幣や硬貨、図書館の本、水飲み場の噴出口や教会の聖水鉢など多少とも公共性の

(34) 1844年に書かれた 'manuel d'hygiène' の中の「あまりに回数が多い入浴は、特にかなり熱い湯の場合、無気力をもたらす」という記述は、入浴はみだりにすべきではないという古くからの口調とさほどの違いはない。Vigarello, G., *op. cit.*, 187, 188. しかも、この頃の入浴の頻度で、週1回というのはきわめて大胆な部類に入り、月に一度以上入浴を勧める医者は少なかった。*Ibid.*, p. 154, および、A. コルバン著、前掲書、238ページ。また温度についても、19世紀初めのある医者の勧めでは、あまり熱い湯は避けるようにとして、適温を冬は18-20度、夏は20-24度としており、熱い風呂といってもわれわれ日本人とは熱さの基準が違っている。ジャック・パンセ・イヴァンヌ・デランドル著、青山典子訳「美容の歴史」白水社 1961年、104, 105ページ。

(35) A. コルバン著、前掲書、238, 239ページ。

(36) Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 184-187, 217-229.

(37) *Ibid.*, p. 219.

あるものは、衛生学者たちの攻撃的となった。⁽³⁸⁾特に重要視されたのは手と口、すなわち、物に付着したばい菌が手から口に運ばれる経路であった。あらゆる物に触れた後は石鹸で手を洗う習慣が励行され始めた。

このように、医学の側での革新は19世紀の後半から末にかけて比較的遅くに現われたものであり、さきに述べた18世紀から19世紀にかけてのブルジョワジーの態度の変化はそれに先行している。まず、生活道徳上の潔癖さを尊ぶ心性が現れ、それを追いかける形で科学的根拠が固められ、これを権威づけたということになるのだろうか。清潔さの概念は、そのよりどころとするものがきわめて曖昧なままで、人々の価値観の中に大きな場所を占めるようになったのである。

5. 新たな習慣の浸透（変化を受け入れるもの）

18～19世紀にブルジョワジーによって理想化された清潔さを求める規範は、人々にどのように受けとめられ、実践に移されたのはいつごろだろうか。都市衛生の改善などの集団の清潔に関しては比較的良好に知られているものの、入浴や洗濯など個人的レベルでの清潔慣習については資料が著しく不足している。しかし、限られた資料からも、日常習慣として洗浄が定着するのはきわめて遅かったと考えざるをえない。

入浴慣行の広まりを阻むものはなんと言っても水の不足であった。ヨー

(38) *Ibid.*, p. 218, 219.

(39) ただし19世紀においても、道徳上、入浴に関してはこれを推奨する一方で、好ましくないとする意見も根強くある。裸体になる入浴行為は性的なものを連想させ、一人きりの入浴というのも警戒の対象であった。「一人で入浴する場合、生徒は誰も監視されることがなくなる。彼らは一人でよからぬ考えにふける。彼らは暖かい湯の刺激に駆り立てられる。温水浴は病気の生徒にのみ望ましく、彼らについても片時も目を離せない」として、少年たちに専ら勧められたのは夏期の川での水浴びであった。温水浴についての弛緩と軟弱の否定的イメージは相変わらず強い。若い女性には局部の洗浄を最小限にとどめ、しかも拭き終わるまで目を閉じるよう助言されている。*Ibid.*, pp. 187-190. 19世紀中期以降のヨーロッパにおける肉体観の変化を、とりわけ性道徳との関わりを中心に考慮しているのが、スティーン・カーン著、喜多迅鷹・元子訳、「肉体の文化史～体構造と宿命」。

ロッパでは、都市でも農村部でも水を確保するのは難しく、水汲み仕事は主婦の日常の作業のうちで最もつらい仕事であった。⁽⁴⁰⁾ 都市の市壁外の川や泉水から引いてきた水を何カ所かにある水汲み場に振り分けると僅かな量にしかならず、水道の整備が始まって各戸への給水は遅れていて、街を売り歩く水売りから金を出して水を買うことも多かった。パリではペリエ兄弟の水道会社の設立により給水量は増えたが⁽⁴¹⁾、1811年のウルク運河の完成でその三倍の水が確保できるようになって、パリ市民一人一日当たりがようやく7.5ℓになったということであるから、これでは需要をまかなえるものではない。⁽⁴²⁾ 各戸給水も可能になったが、水質は悪かったので、本当に安心できる水が得られるようになるには、1865年のデュイ水道と1874年のヴァンヌ水道の完成を待たなければならなかった。⁽⁴³⁾ 地方ではもっと状況は悪かった。20世紀初めまで不衛生な水の使用は一般的であり、しかも水の量は常に不足していた。⁽⁴⁴⁾

18世紀終わり頃から盛んに設けられた公共浴場は、普通の労働者の日当の3～5倍はする入浴料をとり、水治療法を目的にやって来る金持ちのためのものであった。⁽⁴⁵⁾ 公共浴場の数は年ごとに増え、さらに水道整備と共に郊外から街の中心部へと場所を移した。パリでは、1816年には15、1831年には78の公共浴場を数え、1835年、A. Hugo はパリのどの地区にも公共浴場があると記している。⁽⁴⁶⁾ しかし、公共浴場は誰もが利用できたわけではない。当時の試算でも、1819年で70万パリ市民に対するべ60万回の入浴を提供できるにすぎず、平均すると一人年間一回未満である。1850年において

(40) Thuillier, G., "Pour une histoire régionale de l'eau en Nivernais au XIX^e siècle", *Annales (E. S. C.)*, 1968 No. 1, pp. 49, 50.

(41) 鯖田豊之著、「水道の文化～西欧と日本～」新潮社 1983年、28-67ページ。

(42) Vigarello, G., *op. cit.*, p. 196.

(43) *Ibid.*, p. 216. 1870年以後の Belgrand 水道網の完成により、各家庭への給水量は大幅に増え、一日一人当たり114ℓとなった。

(44) Thuillier, G., "Pour une histoire régionale de l'eau", pp. 49-68.

(45) Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 170, 171.

(46) *Ibid.*, p. 197.

も一人年間二回によりやく届く程度である⁽⁴⁷⁾。しかもこれらは金持ち居住区に集中しており、貧民のためのものではなかった。大勢の使用人が働き、バスローブなど付属備品は使い放題で、読書室や個人用の化粧室まで備えた豪華なものさえ見られる⁽⁴⁸⁾。これらの公共浴場を利用していた市民はまだ少なく、さらに彼らが一年間に使う入浴費用がだいたい3.5フランぐらいであったと1835年に A. Hugo は述べているので、その入浴回数はせいぜい一年に3回から5回ということになる⁽⁴⁹⁾。したがって、こうした公共浴場は余裕のある市民にとっての時たまの娯楽として用いられていたのであろう。19世紀半ばまでは、貧しい人々には川での水浴しか実際には利用できない状態であった。1852年、皇帝が私費を投じて、大衆向けの公共浴場の設置のための基金を設けた⁽⁵⁰⁾。

公共浴場の利用と並んで、ブルジョワ階層においては、18世紀末頃から個人の住宅に浴室を設ける例が少しずつ現れ始める。しかし、19世紀中期においては一部を除いて、まだブルジョワ階層にとっても自宅の浴室は一般的なものではなく、公共浴場を利用したり、風呂の出前を受ける家が多かった⁽⁵¹⁾。しかし、給排水などの周辺設備が整うと⁽⁵²⁾、変化は着実に進んだ。1870年頃から住宅の各層への給水が進み、1880年頃から寝室の横に浴室を設ける例が増加し、20世紀初頭にはブルジョワ家庭にとって

(47) *Ibid.*, pp. 199, 200.

(48) *Ibid.*, p. 203. この豪華な浴場の料金は5フランから20フラン。当時の労働者の日当は2.5フランであった。

(49) *Ibid.*, p. 200.

(50) *Ibid.*, pp. 214-216.

(51) 多くの公共浴場は個人の家への風呂の出前も行っていた。モンマルトル通りにある浴場とサンジェルマン通りにある浴場の1838年の風呂の出前は、それぞれその入浴提供件数の六分の一、三分の一を占めていた。*Ibid.*, p. 189.

(52) 1880～90年の *Semaine des constructeurs* 誌には、ガス湯沸器設備の実験がシリーズで掲載され、1907年、Porcher 商会は82,000基の湯沸器を販売した。*Ibid.*, pp. 232, 234.

はこれが標準となる。19世紀の間には、きわめて多種多様な浴槽が次々と登場し、入浴の形式がまだ標準化されていず、手探りの状態であったことがわかる。今日の形態に似たものもあったが、全身をつける必要のない部分入浴のためのものが人気が高かった。シャワー付きの風呂や折り畳み式浴槽、旅行用の携帯浴槽まで現れた。いずれも、懇切丁寧な使用説明書が付いており、購入者にとって入浴が新しい経験であることを窺わせる。⁽⁵³⁾ 1855年、教育家 J. Masse により著された 'Encyclopédie de la santé' には、まったく入浴方法を知らない人々にも理解し、入浴できるよう、手軽で安価な入浴法についてのかみくだいた説明がある。「必要なのは小さな空のたらい、冷たい水を半分ぐらい入れた深皿、やかん一杯の湯、大きなスポンジ二つ（雑貨店で売っている床掃除用のスポンジ）、大きめのフランネルの布切れ、タオルか布である。フランネルの布をとり、体全体をそれで擦る。特に、腋の下、寝汗をかきやすい場所はどこでもよく擦る。…言うまでもないが、その前に最低20度の湯を、冷たい水のはいった深皿に湯を入れてつくっておく。この湯を入れた深皿は、とりやすいようにテーブルの角の所にのせておく。両手にスポンジを一つずつ取り、皿の湯に浸して洗う作業を始める。…すぐにやめないで少なくとも1分間は洗うこと。終わったらすぐたらいから出て、タオルですみやかに水を拭き取る」⁽⁵⁴⁾。これが当時の庶民にとって実行可能な入浴方法であった。

一般の人々の状態には19世紀の間ほとんど変化がなかったように思われる。1897年に Vacher de Lapouge が記しているところによると、「カトリックの地方では、皮膚の衛生はほとんど知られていない。フランスでは、女性の大多数は生涯一度も入浴することなく、男性も軍隊での水浴を除けば、大半は同様である。ポワチエでは（1874年には）浴室のある邸宅へ宿泊しようとした議員をある婦人が非難したと聞く。同じ頃、女子修道院の中には生徒に体を洗うことを一切禁止しているものがある。レンヌでは、

(53) L. ライト著、前掲書、213-224ページ。

(54) Vigarello, G., *op. cit.*, pp. 210, 211.

まだ今日でも30の浴槽が7万の都市人口の需要を満たしており、2軒の個人の邸宅が浴槽を備えている⁽⁵⁵⁾。地方の特に農村地域においては、20世紀に入っても入浴習慣は一般的ではなかった。G. Thuillier は1914年、あるいは1940年以後も個人衛生の旧体制は続く⁽⁵⁶⁾と見ている。

一般大衆の中に新しい生活習慣を形成させる意図で用いられたのが、学校教育と軍隊である。1890～1910年に、フランスでは学校における衛生教育の導入が積極的にすすめられ、生徒の手やシャツ、下着などの検査を実施して、厳しく指導がなされた⁽⁵⁷⁾。もっとも、ここで重視されたのは外見がきちんとしているかであり、道徳教育の一貫としての色あいが強かった。軍隊においてもこの点は同じであった。規律を尊び、不潔さを退治して集団生活の中で発生しがちな病気の発生を防ぐというのがその主要な目的であり、監獄での入浴強制はその典型である。こうして集団で用いられたのが主としてシャワーであったということにもそれは表れている。シャワーの使用は浴槽の使用より短時間ですみ、しかも経済的であった。1857年のマルセイユの軍隊でのシャワーの使用の初期の例は、定量の水の出るパイプを使ったもので、別室で脱衣をし、石鹸を持って三人一緒にパイプの下に立って3分間洗い、すばやく次と交替した⁽⁵⁸⁾。学校にもシャワーはとり入れられ、1910年には109の男子のリセのうち69、47の女子のリセにはすべてシャワーが設置されていた⁽⁵⁹⁾。最低限の空間内における最低限の量の水を使つての強制的なシャワーの使用は、それをおそらく初めて体験する多くの人に、どのような受けとめ方をされたのだろうか。家庭環境とは離れた特殊な場所での寒々しい集団のシャワーの与えるイメージは決して好ましいものではなかったように思われる。そこで追求されるのはひたすら機能性

(55) Thuillier, G., "Pour une histoire de l'hygiène corporelle, un exemple régionale: le Nivernais", *Revue d'histoire économique et sociale*, 1968 Vol. 46, pp. 232-253.

(56) *Ibid.*, p. 243.

(57) *Ibid.*, pp. 210-214.

(58) *Ibid.*, p. 236.

(59) *Ibid.*, p. 237.

と効率性のみであった。清潔さを獲得したとはいえ、かつて恐怖の対象であった水は、人々にとってやはりそれほど親しい存在になったとは言えないのではないだろうか。

結びにかえて

清潔観がヨーロッパ社会においてどのように移ってきたかをふりかえてみると、生活意識がほとんど変わらないように見えながらも、実はさまざまな変化の道をたどっていることが理解される。変化の方向に影響を与えているのは、権威づけられ、正確であると（当時においてはであるが）信じられていた知識ではなく、その時代において最も生き生きとした活力を有していた社会勢力の生活信条とそのエネルギーであるように思われる。貴族社会における独特の dry wash に見られる清潔観、ブルジョワジーの近代的合理主義に基づく清潔観はやはりそれぞれの社会勢力がその社会において展開した存在意義（社会的・政治的・宗教的等々）や、その勢力の文化的志向性に深く関わっている。自らの生活に没念し、他に無関心な閉ざされた貴族社会の清潔観は下の階層にほとんど積極的に影響を及ぼすことはなかった（むしろそれを独占しておくことが彼らにとって重要であった）のに対し、普遍性を求めるブルジョワジーは社会の隅ずみにまで自らの価値観を行き渡らせるのに努力を傾けた。しかし、人々の受け止めはすみやかではなかったが。

かつては、色、香り、肌触りなどを媒介にして清潔さも、今日においてはもはやなかば無意識的となってしまった洗浄行為（朝晩の歯磨きや、髪のとぎつけ、体の洗浄等々）をした結果あたりまえに得られるべきものとしてしか意識されなくなっている。われわれは頭の中でしか清潔さを思い起こすことができなくなってしまったのかもしれない。感覚の歴史を探ることにより、われわれは自らの感性のつややかさが後退し、鈍化してしまっているのを知るのでないだろうか。